(六) 南海の予言

頃は弘安四年（一二八一）、元軍の来襲に亀山天皇は深くえいりよを悩まし給い、おそれおおくも御身を国の為にかえんと神明に祈らせたまわつた。

この時、南海は身をきよめ、米ケ森権現に十七ケ日参籠祈願をした。やがて十七日が満ちて山をくだり麓の村の百姓を集め、元軍が来襲してくることを語り、国難であるが、これより十日ばかり毒風が吹き、蒙古の軍勢はことごとく滅んでしまうから心配無用だといつた。それを聞いた農民達は大変よろこび一同そろつて、米ケ森権現に参拝して、国の安穏を祈つた。

その予言があつてから長い日がたつて、南海のいつたように蒙古軍が全滅した知らせが届いた。村人は南海の予言の適中に、その神徳を謝せんと、衣類、食物、金銀等をもつて、南海の庵にそくそくと集つた。南海はこの有様に全く驚き、戸を閉して一切の物を受けないので、村人は困り果て集つて相談した結果、寺を建てて寄進しようということになつた。代表のものたちが、南海にその旨を語ると、南海は「我はすでに百二十八才にして最早滅する時が近い、今はただこの草庵にて死を迎えたい気持でいつぱいだ」と百姓達の心はありがたいが、その必要はないとことわつたという。